

第二章 古代の山科

山科の古代については、以前から文献史学や歴史地理学の面から多くの研究成果が積み重ねられてきた。近年では、安祥寺に関する京都大学を中心とする文献史学・考古学・美術史学などからの総合研究が注目されるが、その成果は安祥寺という個別寺院史にとどまらず、広く古代史上の山科の位置づけにまで及ぶ豊富な内容を提供している。研究成果は研究報告以外に『皇太后の山科―山科安祥寺の創建と古代山林寺院―』（柳原出版、二〇〇七年）として一般にも読みやすい形で提供されているが、同書に収載された上原真人・吉川真司・梶川敏夫らの論考は、それ以前の研究成果を整理するとともに山科地域の古代史の特徴を的確に指摘しており、本稿はその成果に大きく拠っている。

一 歴史的環境

山科は、平安京から東に伸びる三つの幹線道路（東海道・東山道・北陸道）が通過する、京のいわば東方への出入口であった。東国から京へ、あるいは京から東国へと向かう人や物資の多くは山科を経由した。こうした交通上の特性に大きく由来するのであろうが、山科はまた、敦賀など日本海沿岸に到着した渤海の使者たちが京へ入る直前に迎接されるなど、京の東郊ならではの特別な機能が付与された地域でもあった。しかし以上の特性は、平安京とともに初めて形作られたものではない。遅くとも七世紀後期以来の歴史のなかで構成されてきた特性といえるべきものである。

それを視覚的に語る史料が「山城国山科郷古図」（通称「山科郷古図」）である。「山科郷古図」は、一二世紀後期ころに勧修寺により寺領の所在を主張するために作成された絵図と考えられているが、そこには山と平地との境界や条里の界線、里名、主要な寺・堂・神社・池・道などが記され、古代から中世前期の山科を復元的に考えることができる。

同図中の現在の山科区に相当する区域には、（一）盆地北端を東西に横断して京と近江を結ぶ道、（二）盆地東端でその道と分かれ、音羽山から続く醍醐山地の縁に沿って南下し、小野・醍醐を経由して石田に至る道、（三）阿弥陀ヶ峯の南と北で東山を越え、南花山付近で合流して盆地の西縁を南東に延びる道（勧修寺で東に伸び、小野で（二）に合流する道を分岐する）が描かれている。（一）は日ノ岡越の現三条街道、（二）は渋谷越と滑石越という平安京と結ぶ道に相当し、（三）は古図では南部の道には接続していないが、大和と北陸とを結ぶ古北陸道に由来する現在の旧奈良街道と考えられる。この道は、七世紀後期には、山科盆地北東端から小関越を経て近江大津宮に直結する道であったとされ、奈良時代には山科駅が設けられていた。山科の基本的な交通環境が古代に形作られたものであったことが、あらためて理解されるだろう。

律令制下において、山科盆地は山背（山城）国宇治郡に属した。一〇世紀に編纂された『倭名類聚抄』国郡部の宇治郡の項には、宇治・大國・賀美・岡屋・小野・山科・小栗・余部の八郷が記されているが、山科盆地にはこのうちの小野・山科・小栗・余部の四郷が設定された。山科・小野・小栗はそれぞれ現在の山科・小野・小栗栖の地名に継承されている。また、貞観九年（八六七）に成立した『安祥寺資財帳』には、安祥寺の寺域の山五〇町の四至（東西南北の範囲）の記載に続いて、「山城国宇治郡余部郷の北方に在り。安祥寺上寺は其の裏に在り」と記されるが、安祥寺上寺の遺構はJ R山科駅北方の安祥寺川上流北側の尾根上で確認されている。また、同資財帳に記される安祥寺の買得地・施入地の中には余部郷の里として（三条）弓弦羽里・三条石雲北里・一条山口・二条大伏などがあり、これらは「山科郷古図」に描かれる現三条街道を挟んだ南北の地区に相当する。これらのことから、余部郷は現三条街道周辺の盆地北部にあったことが明らかで、とすれば山科郷は小栗・小野郷と余部郷の中間、すなわち山科盆地のほぼ中央部に設定されたとみてよい。吉川真司は、山科郷は音羽川・四ノ宮川・安祥寺川によって形成された山科盆地北東部の扇状地に、小野郷は山科川（上記三

川の合流点以南）から旧安祥寺川流域にわたる盆地北西部に、余部郷を盆地北辺に比定し、東西から山地が迫って盆地が狭隘になる醍醐から南にかけての地域に小栗郷があったと推定している。

古代の山科区域に暮らしていた人々についても、いくつか史料がある。最も知られているのが、「山科陶原家」に住んだと記される（『扶桑略記』『家伝』『三宝絵詞』）中臣鎌子（藤原鎌足）であろう。鎌足はこの家の一隅に精舎（仏堂）を建て、それが後に山階寺と呼ばれ、さらには大和国興福寺へと発展したと伝えられる。『安祥寺資財帳』は安祥寺下寺の寺領は西限を「山陵」（古図の「陶田北里」）に所在する天智天皇陵）に、南限を「興福寺地」に接すると記すが、吉川は「興福寺地」を鎌足旧宅の後身と考え、保元三年（一一五八）「山城国安祥寺領寺辺田畠在家検注帳案」に安祥寺西南部の寺領（大槻北里）の南に接する大槻里北半に安祥寺以外の所有地が所在していることから、ここを「興福寺地」すなわち「陶原家」の所在地と推定した。現在のJR山科駅南西方の京都薬科大学キャンパス付近に相当する。この「陶原家」と関係して、田辺史氏・上毛野氏も居住していたらしい。

一方、宇治郡には宇治宿祢氏や宇治連氏が広く居住していたことが、東大寺に残る奈良～平安前期の売券（『大日本古文書』家わけ東大寺文書に収載）などから知られる。宇治宿祢氏には郡の大領・少領を、宇治連氏には主帳の地位をもつ者が確認されることから、両者は宇治郡の郡司職を担う伝統氏族であったと見做される。山科区域に限れば、康保元年（九六四）の「醍醐寺牒案」（『平安遺文』収載）に、山科郷の陵戸として宇治峯真・国背好男・大宅豊宗、保元元年（一一五六）「山城国貢御人小野郷司藤原経成解」に散位藤原経成の名がみえ、後述するように『今昔物語集』に至って宮道弥益らの名がみえる。

興味深いのは売券に岡屋郷（宇治市五ヶ庄の岡屋が遺称地）の戸主として道守臣人足という名がみえること、道守氏は越前の郡領氏族として知られる地方豪族であるから、ここには古北陸道を通した越前方面との交流による人の移動が垣間見えるといえるだろう。

二 平安京と山科

平安京への遷都は山科盆地に大きな影響を与えた。まず第一は、主要な交通路の切り替えにより、前述した三本の通路が揃ったことである。長岡京時代は東海・東山・北陸道は六地蔵から奈良時代の北陸道を辿り、逢坂を越えたところで分岐したらしいが、平安京の造営後は京の直近から深草丘陵を横断して山科盆地に入り、盆地を東西に横断する通路が中心軸になった。延暦二三年（八〇四）の山科駅の廃止は、この主要官道の切替えに伴う措置といつてよいだろう。しかしそうはいつても、畿内の重要幹線道路の一つであった京と南都奈良を結ぶ道の渡河点宇治へと至る旧北陸道は、「山科郷古図」にも反映されるように依然として機能を有していたから、山科の交通上の重要性はより高くなったというべきであろう。山科は古代においても京郊外の重要なインターチェンジ機能をもつ地域であった。

日ノ岡越・洪谷越・滑石越のうち、以後の歴史の中で主要道となったのは日ノ岡越であるが、京造営の当初からその位置づけであったかどうかはわからない。但し、天曆三年（九四九）には「粟田山路」の損傷により車馬の往還に支障をきたしているとし、山城国に実検を指示する官旨が出されているから（『日本紀略』）、当時既に現三条街道が物資輸送上の主要道となっていた様子がうかがわれる。慶滋保胤の「池亭記」にも記されているように、一〇世紀後期以降は京市街地が左京を中心に展開し、貴族邸宅も左京の四条以北に営まれることが多くなると、日常的に日ノ岡越が主要道として機能することになったはずである。前九年合戦（一〇五一～六二）の後に源頼義が持ち帰った安倍貞任らの首が「粟田山大谷北丘」に掲げられたのは、日ノ岡峠道が京の東の出入り口として確固たる位置を占めていたことのあらわれであろうし、院政期に発展する白河街区は日ノ岡峠を西に越えたところにあった。

滑石越の道の位置づけについては、坂上田村麻呂の墓に比定される西野山古墓の存在がヒントになる。西野山古墓は滑石越の山科側からの登り口に近い斜面地につくられているが、大正八年（一九一九）に発見され、

正倉院宝物に類例をみることができるといえる。金装太刀や金銀平脱双鳳文鏡を含む豪華な副葬品（国宝に指定されている）が多数出土したことで注目されてきた墓である。一方、坂上田村麻呂の墓については、『清水寺縁起』に載せる弘仁二年（八一）太政官符に四至の記載があり、吉川真司はこれをもとに西野山古墓こそ坂上田村麻呂の墓であるとし、国家の大事の際に墓が鳴動したとか、坂東や奥地に向う將軍が詣でたとかいう『清水寺縁起』の説話からうかがえる、東方や北方の敵から京を守護する墓としての位置づけにふさわしいとされた。実際に滑石越は平安京羅城門に最も近接した通路であり、羅城門は京への正式な出入り口であったし、鴨川にかかる唯一の橋（辛橋・韓橋）は左京の東南端に近い位置に架けられていた。吉川は西野山古墓（坂上田村麻呂墓）の存在から、日ノ岡越を東海・東山・北陸三道を兼ねる大路であったとしながらも、渤海使の入京や征夷大將軍の凱旋などの威儀を整えての入京に際しては滑石越が用いられたと推測し、この道が京の東の玄関であったと位置づけている。

三 遊獵・別業の地山科

平安京の造営がもたらした影響の第二は、山科が貴族たちの京外での活動の舞台となったことである。大津宮の時代にも天智天皇が山科野で遊獵をした記録があるが（天智天皇八年＝六六九）、桓武天皇は延暦十三年（七九四）十二月に山科野で遊獵して以来、頻繁に山科野・日野で遊獵を行った。

山科で活動したのは天皇だけではない。平安期になると「山科」を冠した通称名をもつ貴族や貴族の別業（別邸）が史料に散見されるようになる。「前山科大臣」と称された嵯峨朝の右大臣藤原園人、「後山科大臣」と称された仁明朝の右大臣藤原三守がそれで、恐らくは山科に別業を所有していたことに由来する名であろう。桓武朝の参議紀勝長の「山階宅」もあつた。仁明天皇の第四皇子人康親王は出家後に山科に住んだとされ（『一代要記』）、近世の地誌は十禪寺周辺をその屋敷の跡とし、四ノ宮の地名もこれに因むとする。これらの名称や伝

承は、山科が上級貴族たちにとって京から文字通りひと山越えた、静養・隠遁・遊樂のための比較的自由的な空間として重宝された地域であつたことを物語る。

『今昔物語集』「高藤の内大臣の語」（巻二二の第七話）に載る、勧修寺開創に関わる説話にも、平安京に住む貴族たちにとつての山科の性格が反映している。勧修寺については後述するが、説話では、藤原冬嗣の子・良門（良房の弟）の子の高藤が南山科での鷹狩りの最中、兩宿りに立ち寄った家で主人の歓待を受け、その娘と一夜の契りを結んだことが勧修寺建立に至る出発点となつていた。説話であるからそのままに事実と解するわけにはいかないが、説話の舞台設定として違和感をもたれないほどに、貴族にとつて山科が気安く遊獵を楽しむことのできる近郊の地域であつたことは認めてもよいのではないだろうか。

四 安祥寺の建立

平安遷都以前の七～八世紀において、のちの京とその縁辺部においては幾つもの寺院が建立された。北野廃寺（北区）・北白川廃寺（左京区）・檉原廢寺（西京区）などは考古学的に調査された寺院跡としてよく知られているし、八坂の法観寺（東山区）は現在も当初の塔位置を保ちながら存続している。山科盆地においても、大宅廢寺（山科区）をはじめ法琳寺・醍醐廢寺（伏見区）などが建立された（第一章）。

平安遷都以後の仏教界で顕著になってくるのは、京周辺における山林寺院の建立であり、山科もその舞台の一つとなつた。そもそも律令制国家にとつて仏教は鎮護国家の役割を担い、僧尼の主たる活動は寺院を舞台としたが、他方その役割を可能にする優れた能力の獲得のためには俗世を離れた静寂な山林での修業が重視され、奈良時代を通して各地に山林寺院がつくられるようになった。京都盆地直近の地においても、八世紀末には最澄が創建した比叡山寺（のちの延暦寺）と和氣氏が建立した高雄山寺（のちの神護寺）としてその姿を見出すことができる。

平安京造営に際しては京内には東寺・西寺の官寺のみが創建され、京内での寺の建立は永く認められなかった。必然的に京の周辺部に寺院が建立されることになるが、九世紀後期以降になると、京周辺の山地に密教系の山林寺院が多数つくられるようになる。山科地域においてその先鞭となるのが安祥寺であった。

安祥寺は、仁明天皇の女御藤原順子（文徳天皇生母・冬嗣の女）を本願主、真言を学んだ入唐帰朝僧惠運を開山として、嘉祥元年（八四八）に創建された。惠運は前撰津国少掾上毛野松雄の所有する松山一箇峰を得て造営に着手したが、仁寿元年（八五一）には僧七人を置くまでになり、斉衡二年（八五五）には国から一定の運営経費を支給される定額寺に認定され、翌斉衡三年には寺の四辺の山を順子が買い上げて施入し、こうして寺域・施設が整えられた。こうした経緯は、惠運が作成し勸修寺に伝来して写本が作られ、東寺観智院に残された『安祥寺資財帳』や他の史料によって明らかになる。また、『延喜式』によれば、安祥寺で階業を終えた僧は諸国の講読師に任命され、安祥寺の修理経費のための財源が土佐国の財政の中に設定されるなど、安祥寺は国家的な保護を受けた。



図一 木造五智如来坐像

安祥寺は上寺と下寺とから成り、上寺は安祥寺川に沿ってのほり、北側の安祥寺山の山頂に近い南斜面に、『安祥寺資財帳』に載る礼仏堂・五大堂などに比定される遺構が確認されている。安祥寺所蔵の五智如来像や東寺観智院に伝わる五大虚空蔵菩薩坐像は、創建期の上寺に安置されていたらしい。下寺は応仁・文明の乱で灰燼に帰し、現在の安祥寺は徳川幕府の援助で一七世紀前期にかつての寺域内に再興されたもので、創建期の下寺の位置はわかっていない。順子は貞観十三年（八七二）に没し、その墓は安祥寺山中につくられた（後山科陵）。

平安中期以降、安祥寺は次第に衰微し、勸修寺第五世長史の深覚が安祥寺第六世座主を兼ねるに至って、勸修寺の影響下に入ったらしい。次いで勸修寺第六世長史の信覚が安祥寺第九世座主を兼務し、信覚は勸修寺長史・安祥寺座主とともに般若に譲り（『山科安祥寺誌』）、このち般若の弟子の宗意が安祥寺、寛信が勸修寺、増俊が隨心院を継ぎ、いわゆる小野流三派の祖となった

五 勸修寺の創建

九世紀末に開創され、先行する安祥寺を勢力下に組み込み、山科盆地における重要な真言宗の拠点寺院としての発展を示したのが勸修寺である。先に触れた『今昔物語集』の説話では、藤原高藤が一夜の契りを結んだ娘は宇治郡大領宮道弥益の娘列子で、二人の間に生まれた娘胤子はのちに宇多天皇の女御となって醍醐天皇を産み、宮道弥益はその縁で修理大夫にのぼったという。弥益はのちにその家を寺にあらため、それが勸修寺の始まりであるといい、弥益の妻が東方の向いの山辺に建立した堂が大宅寺であるという。一方、延喜五年（九〇五）九月二十一日付の太政官符（『類聚三代格』）には、胤子が生前に醍醐天皇を守護するために建立したとあり、胤子死去の寛平八年（八九六）以前に建立されたことになる。

宮道弥益は漏刻博士などを務める京の下級官人としてみえ（『日本三代実録』）、大領が事実とすれば伝統的な郡領氏族宇治宿祢氏に代わって成長してきた氏族と予想されるが、その経緯を推測する史料もなく、『今昔物語集』の説話のすべてを信じることはできない。しかし高藤と列子の間に生まれた胤子が醍醐天皇の母となった系譜そのものは事実であり、勸修寺の周辺に高藤（小野墓）・列子（後小野墓）・胤子（小野陵）などの陵墓が営まれたことからすると、勸修寺が弥益の家に起源をもつことは信じてよいと思われる。

後世の史料ではあるが、『勸修寺旧記』（続群書類従所収）には、弥益が鷹屋のあとを本堂とし、その南に胤子と弥益が承俊を行事として建立した御願堂、その東に一重の多宝塔、本堂の西に右大臣定方（胤子の兄）が

亡母列子のために建立した西堂などがあったと記す。『旧記』はほかに醍醐天皇御願の灌頂堂や一条天皇御願の薬師堂などもあったと記し、延喜年間以降に次第に寺観が整えられていった様子が窺われる。注目されるのは西堂で、定方の忌日に当たる八月には一門が参集する法華八講が催され、一門の長者が「西堂長者」という地位を兼ねて勸修寺を管理するようになる。勸修寺はいわば一門の氏寺的性格をもつことになり、勸修寺を中核として紐帯を確認する高藤流は勸修寺の名を冠して呼ばれるようになった。

醍醐天皇の後、皇位は基経の娘穂子出生の村上天皇、安子（基経の孫・忠平の娘）出生の冷泉・円融天皇へと受け継がれ、師輔の子孫の九条流が外戚の地位を独占することになった。これに伴い高藤の子孫の勸修寺流は貴族社会での地位を下げるようになったが、十一世紀末〜一二世紀初めの為房の時代に大きな変化の時期を迎える。

為房は白河上皇の近臣（院別当）として精力的に活動し、鳥羽天皇の即位とともに藏人頭となる一方、藤原師実・師通の家司として摂関家の家務をとるなど、その活躍は目覚ましかった。子の顕隆も白河院の院別当となり、「夜の関白」と称されるほどの実力を誇った。これ以後、高藤流（勸修寺流）は弁官を務め藏人頭を輩出する一方、院や摂関家の実務を担当する弁官家・名家と呼ばれるようになる。いわゆる中世の公家勸修寺家の成立である。同じ時期、為房の子の寛信は勸修寺の別当の地位につき、これ以後は勸修寺家出身の僧が事務を掌握するようになった。寛信は小野流の秘奥を伝授され、密教の修法にも通曉していたと言われ、勸修寺の密教儀式の充実に努めたいらしい。寛信以後、勸修寺は公家の勸修寺家と密接な関係をもちつつ、真言密教小野流の一門流（勸修寺流）の中心寺院として重きをなすことになった。

六 小野流の形成と隨心院

勸修寺にやや遅れて開創され、天皇の御願による堂をもつなど、同じような発展を示した寺が醍醐寺（伏見区）であるが、醍醐寺の関係する活動は現在の山科区域にも及んでいた。醍醐寺は貞観一六年（八七四）、空海の孫弟子聖宝が笠取山の山上（上醍醐）に准胝・如意輪両観音像を安置するための草案を結んだことに始まり、貞観十八年に両観音像の開眼供養が行われたという（『醍醐寺縁起』）。延喜七年（九〇七）には醍醐天皇の勅願寺となり、延喜年間末以降には下醍醐の伽藍の整備が始まるなど、寺勢を発展させることになった。醍醐天皇が聖宝の活動を援助した背景には、高藤・胤子らのゆかりの地である山科への思いがあったとする理解もある。のちに醍醐天皇陵が醍醐に営まれたのも、勸修寺・醍醐寺と天皇との関わりによるといつてよいだろう。聖宝の法脈を継ぐ仁海により小野に開かれた寺が曼荼羅寺で、仁海は真言宗小野流の祖と言われる。隨心院はこの曼荼羅寺の後身と伝え、一二世紀以後は小野流の門流・隨心院流の拠点寺院となった。隨心院はまた小野小町の邸宅跡との伝承でも知られる。どうやら中世につくられた伝説で事実の裏付けはなさそうだが、謡曲などで広く膾炙することによって隨心院が小町の寺として名所化し、境内地やそこに至る道沿いに小町関係の遺跡と伝えられる寺などがあって関心を集めたことも歴史の一面である。

七 元慶寺と慈徳寺

山科の寺としては元慶寺と慈徳寺にも触れておかねばならない。元慶寺は、貞観十年（八六八）清和天皇の中宮藤原高子の陽成天皇出産に際し、遍照が発願して草創した寺であるが、寧ろ寛和二年（九八六）、女御祇子の死を悲嘆する花山天皇が藤原兼家らの策謀にはまって出家に至った事件の舞台として知られる。この事件を契機に一条天皇が即位し、兼家が外祖父として摂政の地位に就くことになった。慈徳寺はその一条天皇の生母藤原詮子により長保元年（九九九）に落慶供養された寺で、長保三年に没した詮子の法会もここで行われた。長和二年（一〇二二）には元慶寺と慈徳寺の寺地の堺が決められているから『御堂関白記』、両寺は近接していたらしい。慈徳寺は一二世紀末の史料を最後にその名がみられなくなるが、元慶寺は現在に法灯をつないでいる。

山科盆地は古くから大和より北陸や東国へ抜ける街道が貫く交通の要衝で、七、八世紀創建の大宅廃寺や元屋敷廃寺などが知られる。実態は明らかでないものの中臣鎌足の邸宅「陶原ノ家」、奈良興福寺の前身寺院山階寺もこの地域にあった。京が平安に遷ってから、安祥寺や勤修寺が開かれた。こうした古代山科を感じられる作例として、勤修寺繡仏（現奈良国立博物館所蔵）や安祥寺五智如来坐像（京都国立博物館寄託）が挙げられる。とくに金剛界五仏たる五智如来像は、平成三十一年（二〇一九）三月に国宝答申を受けたばかりである。安祥寺は九世紀に文徳天皇の母藤原順子発願、恵運開基の寺院で、先行する上寺に追加造営された下寺があり、五智如来像は上寺礼仏堂に伝わる仏像であった。この五軀は木造乾漆併用の堂々たる姿で、面部の表現や体軀の力強さに平安初期の特徴を看取できる。そして平安の山科盆地には曼荼羅寺も存在し、曼荼羅寺こそが隨心院の前身寺院だったのである。

長暦三年（一〇三九）～四年に仁海が撰した『灌頂御願記』では、曼荼羅寺には上下両所があつて、上寺は理源大師聖宝の住んだ上醍醐の延命院であつたと伝える。延命院には、聖宝に続き元方、元杲が住し、仁海の時代に後朱雀天皇の御願によつて下寺が造立され、上下両所を曼荼羅寺と号したという。小野流始祖の仁海は、第二の空海と称されるほど空海と姿かたちがよく似ていた。仁海はまた高野山復興につとめ、東大寺別当、東寺長者を歴任、師元杲から学んだ祈雨法に優れ、雨僧正とも呼ばれた。仁海によつて寺観を整えられた曼荼羅寺は、孫弟子範俊の時、醍醐寺との間で相論が起き、上寺延命院との関係が切れる。それでも範俊の孫弟子増俊の時、曼荼羅寺の塔頭として隨心院が建立され、増俊の孫弟子親嚴の時、後堀河天皇の宣旨で門跡寺院となつた。高い寺格を誇る曼荼羅寺であつたが応仁の乱でほぼ全焼、その後、慶長四年（一五九九）に隨心院として現在地で再興される。このような隨心院は、平安後期の仁海、鎌倉の親嚴、そして二条家との関係で隆盛

した江戸、都合三度の画期を経てなお、一貫して真言密教を源泉とする密嚴仏国土の祈念道場であり続けた。

現在、隨心院では、慶長再興時に建てられた西面する本堂仏壇に仏像が横一列に並ぶ。仏壇中央には厨子入本尊如意輪観音像が安置されるが、秘仏のために通常は姿を拝すことができない。如意輪観音像は、六臂で二重蓮華座に右膝を立てる輪王坐とし、白毫、玉眼を嵌入、寄木造の鎌倉時代につくられた仏像である。持物は輪宝、紅蓮華、宝珠で、念珠を亡失する。宝冠、光背、台座等は後補で、山口隆介の報告では頭部に墨書があると伝えられるが確認できないという。如意輪観音は観音のなかでもっとも遅く成立したとされる尊格で、經典では二臂、四臂、六臂などの姿に説かれる。日本では空海が請来したとされる六臂の作例が最多で、彫刻最古の作例は大阪河内長野市の観心寺像である。観心寺像は発願実恵、造像真紹であつたが、ほかにも恵運、真雅、真然、聖宝、と空海の法灯を継ぐ真言僧たちは挙つて如意輪観音像をつくつた。津田徹英の研究では、上寺延命院にも、聖宝、観賢、元杲が各々造立した如意輪観音像三軀があつたという。すると、現隨心院の本尊は鎌倉時代の作例であるものの、仁海時代に制作した像の再興像かもしれない。

続いて、本尊厨子向かつて右の金剛薩埵坐像に注目したい。金剛 図一 金剛薩埵坐像

薩埵は、大日如来と衆生の菩提心を結びつける存在で、真言付法の第二祖である。金剛界成身会などの示すとおり、この像は左手に五鈷鈴、右手に五鈷杵を執り、蓮華座上に坐している。持物及び光背、台座は後補、頭体幹部一材、左右に割矧ぐ構造である。黒漆で塗られた胎内背部中央に「巧匠法眼快慶」との朱書銘がある。朱書銘は、昭和三十七年（一九六二）に佐和隆研によつて発見され、その書風から快慶の銘とみとめられている。ただし西川杏太郎は、木屎漆での修正が多いこと、両腕の構えを決定するのに苦心していることから、



快慶が弟子を監督してつくらせた可能性を指摘している。

では、快慶及び快慶工房の制作とみられるこの像は、いつ、いかなる背景によって制作されたのか。曼荼羅寺は、親戚時代の承久三年（一二二二）に焼失するが、寛喜元年（一二三二）に門跡寺院になるほどの寺勢だった。快慶が朱書銘のごとく法眼に叙任されるのは承元二年（一二〇八）から承元四年の間、亡くなるのが嘉祿三年（一二二七）とされるから、金剛薩埵像は一二二一年から一二二七年ごろの快慶晩年に制作されたと考えられている。金剛薩埵像の著名な彫刻といえれば東寺講堂像が挙げられるが、講堂には、五仏、五菩薩、五大明王、四天王、梵釈合わせて二十一尊が安置される。この立体曼荼羅のうち五菩薩の一軀が金剛薩埵像である。一方、隨心院にも、前身が曼荼羅寺というからには曼荼羅を示す仏像や絵画があったと思われる。快慶作金剛薩埵像の像高は一〇二・一センチ、東寺講堂像は二十一尊のうちの一軀で、像高が九六・四センチであることを考慮すると、東寺よりも少ない群像、五菩薩のみが快慶によってつくられたのではなからうか。また、金剛薩埵像が古様の彫眼であることから、快慶は古像を意識して制作したとみられる。となると、快慶は再興像として五菩薩を制作した可能性があり、曼荼羅寺では承久焼失前も五菩薩像が安置されていたと考えられよう。井上一稔は、快慶作金剛薩埵像と本尊如意輪観音像の作風が通じるところから、如意輪観音像も快慶周辺の造立とみている。ともに古像再興の感触があることは興味深い。

さて、隨心院の仏壇には、ほかに平安時代後期に制作された旧講堂本尊と伝えられる定朝様の阿弥陀如来像、阿弥陀よりやや遅れる旧金堂本尊と伝えられる薬師如来像、薬師と同時期制作の不動明王像、制作年代が異なる三軀からなる釈迦三尊像、近世の弘法大師像と仁海僧正像が安置されている。また、能の間の艶やかなだるま商店の襖絵「梅匂小町絵図」の奥に、三尺ほどの文張り地蔵がある。小野小町が送られた数多くの恋文を貼り重ねたという地蔵菩薩像であるが、平安時代に制作されている。この地蔵のほか、同じく平安時代につくられた小ぶりの地蔵菩薩像、近世に制作された伝小野小町像がある。このように、隨心院には美術史上、注目

すべき仏像が多く伝えられてきた。丁寧に整えられた寺内には、仏像ばかりでなく絵画や工芸の優品も豊富である。折々に美しい表情をみせる庭園も合わせて楽しみつつ、何度でも足を運びたい寺院である。